

米澤穂信〈小市民〉シリーズにおける謎と探偵／復讐者の役割

澤田 菜穂

一、はじめに

米澤穂信の『春期限定いちごタルト事件』（二〇〇四年）をはじめとする〈小市民〉シリーズは小鳩常悟朗、小佐内ゆきの二人の高校生が「小市民」を志す一方で、互いの謎を解きたがる性格や復讐を好む性格を抑えきれず、さまざまな事件に関与してしまいう姿を描いた、所謂「日常の謎」系ミステリ小説シリーズである。今日において、このような「日常の謎」を扱うミステリ小説は少なくない。特に高校生が主人公という青春小説的要素と組み合わせたミステリ小説は中高生を中心に多くの読者から好まれており、中でも米澤の〈古典部〉シリーズや〈小市民〉シリーズはアニメ化や漫画化も行われ、人気を博している。しかし、多くの「日常の謎」小説が生み出されている中で、なぜ米澤作品に注目が集まるのだろうか。本稿ではミステリ作品において中核を担う謎解き行為に焦点を当て、〈小市民〉シリーズにおける謎解き行為が作品の中でどのような意味を持っているのか、謎を解くことで登場人物たちにどのような影響・効果があるのかについて検

討・考察を行う。その中で〈小市民〉シリーズにおける謎解きに関する独自性を明らかにし、〈小市民〉シリーズが現代の読者に選ばれるその魅力の一つを検証することが本稿の目的である。

なお、本稿ではシリーズ名としての〈小市民〉を示す際には山括弧を用いるが、言葉としての「小市民」を示す際にはかぎ括弧を用いるため、その旨を留意いただきたい。

二、「日常の謎」の構造と「小市民」の定義

〈小市民〉シリーズの舞台は現代日本の高等学校である。この設定は昨今ではありふれたものだが、米澤穂信はなぜ、職業探偵ではない、一介の高校生が謎を解くという設定にしたのだろうか。そもそも「日常の謎」とは具体的にどのようなものなのだろうか。

米澤は北村薫との対談（『米澤穂信と古典部』収録、二〇一七年）にて、「例えば、密室ものというだけで小説的な達成があまりなくても読めるのは、伝統と型の強みです。ところが『日常の謎』は型がなくて、それぞれ別々の物語なんです。どれも一から

物語を作らなければならない」と話している。また物語を書くにあたり、「日常の謎」における「(略) 一番の見せ所は謎に気づくところだと思っんです。こんなところから謎を見つけてくるのか、言われてみれば不思議だ、という。それは他のミステリとはちよつと違う快感ですな」とも述べた。つまり、登場人物たちが普遍的な日常を過ごす中で見つけた違和感、通常目に入らないような微かな異物、日常にひっそりと紛れ込んだイレギュラーが「謎」であり、それを一つずつ拾い上げて構築されるのが「日常の謎」なのだ。その骨子を作品に埋め込む際には当然、太前提として普遍的な日常がなくてはならない。ここが米澤の語る「一から物語を作らなければならない」部分だ。〈小市民〉シリーズでも、『春期限定いちごタルト事件』では二人の高校の合格発表日から物語が始まっている。そこで「小市民」を志す二人の在り方が語られたほか、小鳩の小学校時代の同級生との再会など、事件の外側から物語をはじめているのは日常性を確保するための第一歩と言えるだろう。勿論一卷の冒頭以外にもシリーズを通して、高校生らしく定期試験に挑んだり、恋人を作ってデートをしたりする二人の姿が丁寧に描かれている。しかし、その日常の裏で進行する「謎」が徐々に表出していくことで、二人は「謎」の存在に気づいてしまう。これが、米澤が語る「日常の謎」の見せ所となっている。「謎に気づく」場面だ。言い換えれば、二人の高校生活は「日常性」の象徴であり、「謎」は「非日常性」の象徴そのもののものだ。しかし、ここにシリーズの最大テーマである「小市民」性の獲得との相違が生まれている。

だが、相違点の前にまずは前提として「小市民」とはどのような存在かを確かめたい。これについては安達愛が「〈小市民〉シリーズにおける『成長』の描かれ方」(『百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』、二〇二四年三月)で既に指摘している。この論文内では他者の事情を理解し、程よい距離感を保つことで互いを守る関係こそが「小市民」的世界であり、それを無暗に暴いたり、平穩を脅かしたりするものは忌避される、という定義がなされていた。実際に『冬期限定ボンボンショコラ事件』(二〇二四年)で小鳩は轢き逃げに遭うが、その犯行の動機は他者の秘密へ安易に踏み込んでしまった小鳩への恨みだったことが明かされている。このことから、シリーズ内で語られている「小市民」とは日常を過ごすための一つの共同体に組み込まれることを指していると考えられる。だが、繰り返すように「謎」に関わることは日常とは乖離している。当然だが、一般的な高校生は嬉々として謎を解いたりはしないのだ。さらに米澤の「謎解き」に対する認識が、「謎」および「謎解き」の非日常性を補強している。『米澤穂信と古典部』にて、謎解き行為に対して積極性を見せることは「人の心が分からない子ということになりかねない」と語られていることから「謎解き」が他者の心へ踏み込む行為であり、そこに積極性を出すキャラクターは人の心に対する共感性が乏しい存在となることに対して米澤は自覚的だ。しかし、肝心の小鳩・小佐内両名はその共感性に乏しいキャラクターとして意図的に描かれている。二人は他者の言動に対して理解ができて、他者の心境に寄り添うことができないという「小市

民」を指すには致命的な欠陥を抱えているのだ。だからこそ、「謎」に関わらずにはいられない小鳩と小佐内は「小市民性」の獲得が困難になってしまう。さらに、この共感性の乏しさを「謎解き」行為の側面から読み解いていくと、「謎」に関わることで小鳩、小佐内がなぜ共感性に乏しいのか、どのように他者と関わっているかがより明確になる。

まず、「謎解き」行為は事件に纏わる様々な事象を検討し、仮説を立て、蓋然性を高めた先の因果関係の証明によって成り立つ行為であることは既に小田牧央が「探偵たちの新戦略」(『Critical』、探偵小説研究会、二〇〇九年)にて指摘している。「謎解き」は、犯人が起こした事件を「探偵」が物語の展開を通して再現することで成り立つ行為なのだ。小田が同論文で「因果関係の証明には、論理性と蓋然性の両方が必要となる。論理に矛盾や飛躍があつてはおかしいし、追試で再現性が確認できないなら意味がない。どちらか一方だけでは不十分だ」と述べていること、そして実際の〈小市民〉シリーズの展開は、犯人が引き起こした事件を探偵の小鳩が視点人物として、与えられた情報をもとに、捜査や真相究明をしていることを合わせて考えると、物語の外での犯人の行動を、物語の中で小鳩が再現していると言えるだろう。したがって探偵はあらゆる情報および言動の選択肢の中から犯人と同じものを選び取る必要がある。だからこそ「謎解き」を行うことは「探偵」が犯人を理解する、他者理解と繋がる行為であると考えられる。ただし、「探偵」は感情に対する共感性に乏しい。感情は物証や当時の状況等で再現できるものではない。

例え感情を抱いた本人でさえ、同じ熱量の感情をあとから再現することは困難だろう。当然、他者が再現するなどまず不可能だ。「探偵」は事象や物、言動から得た情報で、事件を再現する力を持った存在だが、一方で人間の感情には再現性がない。したがって「探偵」は感情に対する共感性を有さないことがある。この点は安達愛の「〈小市民〉シリーズにおける『成長』の描かれ方」内でも指摘されている。安達は「ミステリは、論理的に真相に辿り着く文学であり、その役割を担うのが『探偵』である。『探偵』による事件の解決は、非合理性を排除し合理的に行われるため、『空気』を読むことが重視される『小市民』の世界とは相いれない。そのため、『探偵』である常悟朗は、本格原理主義(ミステリ)の世界と『小市民』の世界の狭間で揺さぶられる存在であることが分かった」と述べているのも、探偵における共感性の欠如に対する論拠となるだろう。特に本稿で扱っている〈小市民〉シリーズでの探偵・小鳩常悟朗はシリーズの節々で他者の感情に寄り添えない姿が描かれている。実際に小鳩は『夏期限定トロピカルパフェ事件』(二〇〇六年)にて事件に巻き込まれた小佐内の恐怖に寄り添うことができない。それを小佐内は以下のように述べた。

「略」小鳩くんは絶対、わたしが怖がっていたということ、本当にはしてくれないの。なぜなら小鳩くんは、考えることができるだけだから。共感することができない人だから。……わたしと、おんなじに。(略)」

また、『秋期限定栗きんとん事件 下』（二〇〇九年）の中でも小鳩は、一度は恋人関係になった仲丸という女子生徒から別れを告げられた際に共感力の乏しさを見せている。

「きみ、何？ 一年かけて表情ひとつ変わらないって、ほんとそういうこと？ あたし、小鳩ちゃんのこと、ぜんぜんわかんない。冷たい人ってこと？ それとも、人のこと根本的になめてるの？ 小鳩ちゃんには、わかってもらえないと思うけど。あたし、つきあってた子と別れるとき、いつもちょっとだけ悔しいんだ。あたしと別れた後、この人は別の子とつきあって違う顔するんだろなって思うと、悔しかった。でも、いまはそう思わない。小鳩ちゃん、誰とつきあっても絶対変わんないから。前の彼女とも、同じ感じだったんでしょ？」

仲丸の話す「彼女」は小佐内のことだ。二人の関係はあくまでも互恵関係であり、恋愛関係ではない。周囲の人間からの誤解を受け、交際していると思われていただけだ。だが、仲丸の指摘は的を射ている。小鳩は自分の過去の過ちを知る小佐内相手ですえ、互恵関係が及ぼすメリットを考え、『夏期限定トロピカルパフェ事件』時点で、一度は関係の解消を決めているのだから。つまり小鳩は誰が相手でも、表情を変えすることはなかったのだ。小鳩の思考能力が人よりも優れており「謎解き」を通して他者の言動を理解できることは既に触れた。だが小鳩と小佐内は、人の言

動を理解することができても、共感することができない。それは「小市民」を目指す二人にとつて致命的な事実であり、小鳩と小佐内の共感力の乏しさによって「小市民」からの乖離が起きているのは間違いないだろう。では二人が共感性を、ひいては「小市民」性を獲得するためには何が必要なのだろうか。そこには新たに自己理解の問題が関わっていると考える。『夏期限定トロピカルパフェ事件』に載せられた小池啓介の解説では以下の内容が記述されている。

自分が受け入れられないとみるや、世間との関係を拒絶するような極端に走るふたりの姿に象徴されるように、この物語は、ストレートな青春小説というよりも、不器用な若者を描いた小説といえるだろう。世界との距離感にとまどう若者を像を戯画化した物語。ふたりにとつて謎を解くこと、事件にかかわることは、自分たちと世界とのあいだの溝を埋める作業にはかならない。

小池は謎を解くことが世界との距離を近づける手段だと述べている。敷衍すれば、小鳩と小佐内の二人は謎を通してはじめて世界を見て、世界に近づいていると言える。それは二人が探偵／復讐者という役割を通してしか人と関わることができなことも示す。加えて小鳩の謎を解きたがる性格（文中では「狐」と比喻）や、小佐内の復讐をこよなく愛する性格（「狼」と比喻）によって、役割以上に「謎」に対する距離の近さが指摘できる。だ

が本来、「謎」および「謎解き」行為は日常から乖離した事象で

あることを忘れてはいけない。だからこそ、この矛盾した探偵／復讐者の果たす意義と、二人が目指す「小市民」性に二人は悩み、葛藤する。探偵／復讐者としての役割から解き放たれなければ彼らは、彼らが目指す「小市民」にはなれないのだ。しかし、小鳩と小佐内は心から探偵／復讐者の役割から解き放たれたいと思っているのかと問われれば、間違いなく否定できる。『夏期限定トロピカルパフェ事件』での小佐内の身に起きた拉致監禁事件で、小佐内は自分の身に降りかかる危機を事前に知っており、誘拐犯たちの罪を重くさせ、少しでも自分から遠ざけさせるために「身代金目的略取」の冤罪を被せた。小鳩はその事実を事件後に気づき、「嘘つき」だと言ったが、小佐内はお互い様だと言う。

「あれも嘘、これも嘘だったの。みんな言うわ。わたしと小鳩くんは付き合ってるって。でもそれも嘘。学校では小佐内はおとなしいねって言われる。小鳩くんは笑顔が素敵な無難な相手。でも嘘。わたしは家でも嘘をついているの。小鳩くんも、きつとそうでしょう。こんなに嘘ばっかりなんだから……わたしたちが『狐』であり『狼』だっていうのも、きつと嘘なんだわ。だってほら、小鳩くんはこんなに騙されたいし、まだ間違ってる。(中略)そして、わたしもわたし。わたしの計画は、こんなにも見抜かれた。わたしたちがとっても賢い『狐』でも『狼』でもないんだとしたら、『小市民』になるうっていうのも嘘なんだとしたら、何が残るか、ね

え、わかる？」

「残るのは、傲慢なだけの高校生が二人なんだわ……」

二人は『夏期限定トロピカルパフェ事件』を通して、自分たちが口にする「小市民」になりたいという願望とは反対に、「謎解き」行為や「復讐」を行ってきた。それでも、その「謎解き」行為や「復讐」は完全ではない。互いの言動には必ず落ち度があり、自分たちが自覚していた個としての小鳩、小佐内の姿に誤りがあった。シリーズ内で一度目の、自己理解への訂正が入ったのだ。では、以降の二人は「小市民」を目指すことをやめるのか、探偵／復讐者としての役割も放棄されるのかというと、そうではない。二人の自己理解は『秋期限定栗きんとん事件 上』(二〇〇九年)からもう一段階深まっていくのである。ただ、以降は探偵／復讐者として実際に担った役割と重ねて考える必要があるため、いったん節を移し、それぞれの探偵／復讐者としての役割の確認からはじめたい。

三、探偵と復讐者——役割と「謎」への関り

「探偵」の氣質を持った小鳩と、「復讐者」の氣質を持った小佐内が果たす役割とは何か。物語上の役割という意味では答えはシンプルである。「探偵」は謎を解き明かすことを物語上の役割とし、「復讐者」はその反対に物語上に「謎」を設置することを役割としている。両者は「謎」を中心に深い関係で結ばれている。江口雄輔が「都市と探偵小説」(『新青年』読本 昭和グラフィ

ティ」、『新青年』研究会、一九八八年二月）にて「探偵小説であるからには、探偵あるいはそれに代わる存在は確かに必要である。しかし探偵を必要とする事件・謎の奥には犯人がいる。原理的な順序からいえば、探偵よりむしろ犯人の方が先であろう」と指摘している。つまり「復讐者」の動向もその言動の詳細がつかめなければ、「謎」となり、「探偵」の「謎解き」の対象となる。

以上から「探偵」と「復讐者」の関係は「謎」を中心に、「謎」を設置する者、その「謎」を暴く者として表裏一体の関係だといえるだろう。そんな近しい位置に置かれる役割が小鳩、小佐内に付与されていることに加えて、特に本シリーズの二人の場合は性格上の問題で、役割がより明確に表出化している。小鳩の場合は自らの思考能力の高さに自覚的であり、その能力を他者にひけらかしたいという欲望があった。小佐内は自分に危害を加えた人間を屈服させ、復讐を果たすことに何にも代えがたい幸せを感じていた。実際にシリーズの中で二人はその性格を暴走させ、小佐内の復讐を阻止するべく謎解きを行う小鳩という関係図が描かれている。二人は互いに「小市民」を指すことを誓い、互恵関係を結んだ間柄であり、本来は互いに対する抑制装置の役割を果たさなくてはならない。しかし、実際には互いの存在が一種の増幅装置となつてしまい、結果的に「小市民」になるという望みを果たせずにはいた。だからこそ『夏期限定トロピカルフェス事件』において小鳩と小佐内は互恵関係の解消を決めたのだ。そして迎えた『秋期限定栗きんとん事件 上』にて、二人はそれぞれ恋人を作

る。小鳩は既に先述した仲丸という女子生徒と。小佐内は新聞部

に所属する一年生、瓜野という男子生徒と交際関係を結んだ。二人は互恵関係を解消した後もまだ「小市民」を志し、それぞれ「小市民」の恋人を通して自分の性格を抑え込み、自分もまた「小市民」になることを目指していたのだ。だが、その目論見は見事に失敗することになる。この『秋期限定栗きんとん事件 上』『秋期限定栗きんとん事件 下』は小鳩、小佐内に新たな知見をもたらすことになるため、以降はこの上下巻を中心に考察していく。

『秋期限定栗きんとん事件』上下巻は物語が四つの側面から進行している。その内、二つは日常的な側面、二つは事件的（非日常的）な側面だと分類することができる。まず、日常的な側面から見ていく。その一つ目が小鳩と仲丸による恋人らしい日常生活である。『秋期限定栗きんとん事件』上下巻でも小鳩はやはり何度かの謎解きをしてしまう。だが、行動を共にしている仲丸には小鳩の謎を解き明かすことへの欲求が理解できない。結果、小鳩の言葉の意図が上手く伝わらなかったり、理論的な小鳩の考えを仲丸が感情的な面からあつさりとして覆したりする描写が目立つ。二つ目の側面としては小佐内と瓜野の二人が送る恋人同士の日常生活があげられる。小市民的日常を送りたいと望む小佐内に対して、自分の存在を周囲に強く主張したいと望む瓜野が、良い恰好を見せようとする姿が目立つ。一方で小佐内はそんな瓜野を応援してはいるものの、時折彼の行動を制止する一面がみられる。瓜野はその制止を取り合わないが、小佐内は小鳩と共にあつたときと同様に抑止装置的役割を果たそうとしているのがわかる。

事件の（非日常的）な側面としてはまず、一つ目に『秋期限定栗きんとん事件』上下巻においての中心事件である放火事件の核心に迫らんとする新聞部員・瓜野の存在があげられる。事件の捜査、情報の収集、それに対する考察までは基本的に瓜野の視点から語られる。つまり、シリーズ一、二巻とは異なり、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻における視点人物は主に瓜野が中心となっているのである。時折脇道に反れるようにして仲丸とデートを重ねる小鳩の視点が入り混じるものの、シリーズにおける探偵の役割を担っていたはずの小鳩は『秋期限定栗きんとん事件上』の終わりにようやく放火事件へ関わることを決める。したがって、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻に限り、読者は瓜野を「探偵」のポジションに置き、物語を読み進めていくことになっている。そして最後に、小鳩が放火事件について触れる側面が存在する。元新聞部の部長であり小学生時代と高校現在の同級生である堂島が存在と、事件にかかわっているかもしれない小佐内の存在を受け、小鳩が探偵として放火事件に挑む姿が描かれている。先述の瓜野からみた事件の側面と照らし合わせると、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻においては本来中心となるはずの小鳩がはじめは事件の外側に存在していたこと、そして瓜野というクッションが挟まれた結果、本来上下巻という長い時間をかけて行われるはずの推理が、『春期限定いちごタルト事件』や『夏期限定トロピカルパフェ事件』と同じか、それよりも短くなっていることは決して無視できない。このことから、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻の最大の特徴は、本来「探偵」を務めるはず

の小鳩が、その役割を放棄し、探偵役が瓜野に交代していることだと言えるだろう。加えて、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻の中心人物であったはずの瓜野は正確に謎を解くことはできず、事件の真相にたどり着いたのは小鳩であり、犯人を追い詰めたのは小鳩と小佐内の二人だったことを踏まえると、瓜野を中心人物に据える必要性や、仲丸を登場させた意図についても検討すべきである。そして、本稿は瓜野、仲丸の登場を通してシリーズ一、二巻とは異なる意味で「小市民」という問題に対するアプローチが行われているのだと推測する。

すなわち『秋期限定栗きんとん事件』上下巻は小鳩、小佐内の異質さを強調し、「小市民」とは相反する存在であることを示すための作品として描かれているのではないだろうか。二人は『夏期限定トロピカルパフェ事件』にて、互いが自分を人よりも賢い人間だと勘違いしているだけの傲慢な高校生だったのだと結論付け、互恵関係の解消を決めた。しかし、『秋期限定栗きんとん事件』上下巻を通して改めて小鳩、小佐内のキャラクターを見ると一般的に、このシリーズでいうところの「小市民」とはどこまでも相容れない様子がうかがえる。例えば仲丸と小鳩、小佐内と瓜野の関係もその一つだ。小鳩、小佐内はそれぞれ恋人関係を解消したあと、互いの恋人との交際期間中のことを語り合う。

「我ながら、なかなか気の利いたこともしたつもりだよ。だけど辛い、仲丸さんはそれでよくを嫌ったりしなかった。……ばくがどんなに知恵を働かせても、嬉しいことに、その

こと自体に気づかなかった」

小鳩は推理をしても他人に疎まれないという理想の環境を手にしていた。しかし、それは推理自体を認識されない環境であり、他者からの理解を得られないことに小鳩は不満を抱き、当時の気持ちを「糠に釘」と評した。一方でゆきは更に辛辣に評した。

「糠に釘。そうね、わたしもきつと、瓜野くんとききあつてそう思ってた」

「この子、他愛ないなつて」

瓜野は「小市民」としては過激な言動が目立つものの、そこに結果は伴わず、結果として「小市民」の域を超えることができない存在だった。だからこそ小佐内も瓜野の望みを叶えるべく、彼を支え続けていた。献身的に瓜野を支える小佐内は自らの復讐を好む心を抑えることができていたのだ。このように二人は交際相手への不満を露にしたが、本気で「小市民」を志すのであれば環境としては最良とまでは言えずとも、望みを叶える可能性は十分にあったことは否めない。自分の性質を抑え込める環境に身を置き、自分を誤魔化し、それがいつかごまかしではなく、本当の性質になるまで我慢することも二人は選択できたはずだった。その点についても本文中で既に二人が話している。事件の一切が片付いた高校三年生の夏休み明けに、小鳩が小佐内が勧める栗きんとんを食べるため、一緒に出かけているときのことだ。

煮て潰して裏ごしして、それから砂糖と一緒に火にかけるのが栗きんとん。潰け込むシロップを少しずつ濃くしていつ、いつの間にか苺まで甘くしてしまうのがマロングラッセ。よくわかった。

栗きんとんとマロングラッセを作る方法を小鳩に語る小佐内だが、ここにはマロングラッセを瓜野、栗きんとんを小鳩になぞらえている様子がうかがえる。『秋期限定栗きんとん事件 上』では瓜野に対し、マロングラッセを例にして「甘い衣の上に衣をまとい、何枚も重ね着していつて。そうしていくうちにね、栗そのものも、いつかキャンディーみたいに甘くなってしまう。本当はそんなに甘くなかったはずなのに、甘いのは衣だけだったはずなのに。上辺が本性にすり変わる。手段はいつか目的になる。(略)」と語り、「そしてね。あなたがわたしの、シロップなのよ」と話した。一方で『秋期限定栗きんとん事件 下』で栗きんとん、マロングラッセの作り方を聞いた小鳩は、言わずとも小佐内の言葉に秘められた意図を悟る姿をみせた。

よくわかった。そのままではえい自称小市民を、誰からも疎まれないようにする方法論。シロップのように甘い恋人といっしょにいて、砂糖の衣を重ね着するうちに自分も甘くなるうとするのも、一つの方法。小佐内さんはそれを期待していたとはつきり言ったし。だけど結局、それでは上手くいかなかった。マロングラッセ方式は失敗だった。ぼくたちは

煮られて潰されないと、ちゃんとアクが抜けないのだろう。何度も叩き潰されたはずなのに、どうやら裏ごしが足りなかったらしい。いとしの栗きんとん。よくここまで、美味しく仕上がるものだね。

小鳩も小佐内もマロングラッセのように、芯の部分から「小市民」へと至れない。それを選べないほどに、二人はそれぞれ自分が「小市民」になることにも、周りの「小市民」の言動にも違和感を抱いていたからだ。つまり瓜野・仲丸という「小市民」に馴染めないことで、二人は特別とまではいかなくとも、普通とも呼び難い存在であったことが結果的に証明されてしまうのがこの上下巻だったといえる。特に『秋期限定栗きんとん事件』上下巻の瓜野は探偵まがいの行動をとっていることから、シリーズ一、二巻を読んでいた読者は小鳩常悟朗という探偵と比較をせずにはいられない。下巻で明かされていく瓜野が行った謎解きのミス、小鳩ならばしないであろう勘違いを繰り返す姿。そして小鳩常悟朗という探偵と誰よりもそばにいた小佐内ゆきから、瓜野は「小市民」にすぎないと告げられる姿は特に印象的に描かれていると同時に、本シリーズにおける「探偵」としての基準を、「謎」を設置する側の人間である小佐内が示した形となった。

「やめた方がいいって忠告した理由、覚えていたみたいね。わたしは小市民が好きだからって言ったわ。でも正確には、ちよっと違う。もし瓜野くんが自分で犯人を捕まえようとす

るなら、きっと瓜野くんが自分をただの小市民だと思い知る結果になると思ったからよ」

「そうね。ちよっと、聡明さが足りないかな。それと狡猾さも。人の動かし方も、もう少しだけ猜疑心も必要。さっき、わたしが大雨の日に本をお友達に買ってもらったって話したとき、確認しなかったでしょう。ああいうときはね、間違いないって思っても、確認だけはさせてもらおうと思うの。行動力はね及第点かな。期待薄でも現場を見ておく姿勢は大事よ。効率も、もう少し頑張りましょう。十ヶ月かけて、瓜野くんは百万人の容疑者を、十分絞り込むことはできなかった。すごいって思ったところもあるの。自分の手で放火魔を捕まえるためなら、被害が出てもいいって思ってたでしょう。誰が火をつけられても構うもんか、って。その身勝手さは秘密を暴くひとにふさわしいと思う。ただ、総合点は、うーん」

「だけどわたし、失望したとは言わないの」
「そんなことだろうと、思っていたのよ」

この発言をもとに、小佐内は瓜野と決別し、小鳩のもとへと戻る選択をした。先述したように探偵と復讐者は、「謎」を解き明かすものと、「謎」を設置するものである。小鳩と小佐内は、互いのそばにいと互いの抑えたいはずの気質が表出しやすい環境に身を置くことになってしまう。それでも、小佐内が探偵とし

ての基準を満たす小鳩のもとへ戻ることは、小佐内にしてみれば自分の復讐を好む性質を受け入れることと同義であり、小鳩にも同じことが言える。彼らが背負った探偵／復讐者としての役割と、矛盾する「小市民」に対する渴望。その二つにどのような折り合いをつけたのかは下巻にて以下のように描かれた。ただし、引用部分はずべて繋がっているわけではないため、引用後に括弧書きで話者を記述していることはあらかじめ留意いただきたい。

ぼくたちが小市民を名乗るのは、本来的に自意識過剰なことだ。一人だとそれが身に染みる。だけど小佐内さんと二人でいると、その痛々しさが軽くなってしまう。ぼくは小佐内さんに自分の思ひ上がりを許され、小佐内さんはほくに彼女のそれを許される。互恵関係と名付けたその甘えと、それでも小市民を目指すという建前とが摩擦して、ぼくたちは一緒にいられなくなった。(地の文・小鳩)

「わたしたち、とっても賢いわげじゃない。本当に賢かったら、もっと間違いは少ないはずだもの。それになにより、誰も傷つけずにいられるはずだわ」(小佐内)

「だけど、だからといって、ぜんぜん無能だっていうのも嘘なのよ。わたしが自分で思うほど、小鳩くんが自分で思っているほど、わたしたちが賢くなかったとしても。……やっぱり、何もできないひとだって言ってしまうば、嘘になるの。瓜野くんの覚束ない動きを見ながら、わたし思ったわ。もし小鳩くんなら、もう少し上手にやるのに、って。それがただ

の買いかぶりじゃないって、小鳩くんは今夜証明してくれた」(小佐内)

「小市民」とは、まわりに折り合いをつけるためのスローガン。もう二度と孤立しないための建前。ぼくは使い物になりませんから放っておいてください、という白旗。そんなスローガンを三年も掲げ続けて、ようやくわかった。本当に折り合いをつけたいなら、最後の瞬間にぐっと我を殺すためには、そんなものは必要ない。ぼくが白旗を振れば振るほど、内心との乖離がいやみになる。心の中で相手を馬鹿にする気持ち、積もって腐る。そうじゃない。必要なのは、「小市民」の着ぐるみじゃない。たったひとり、わかってくれるひとがそばにいれば充分なのだ、と。(地の文・小鳩)

「誰かがわたしの自意識を砕いて潰してくれるのを待ってたのに。誰かが上から、『調子に乗らないでね』と言ってくれるの待ってたのに。でももう終わり。ずっと待ってたから、もう、時間切れ」(小佐内)

小鳩と小佐内の異質さは「小市民」であった仲丸や、瓜野が許容できるものではなく、「小市民」の枠組みに入ること小鳩と小佐内には困難なものだった。『夏期限定トロピカルパフェ事件』で互いの特別性を否定し、「小市民」にもなれないと自己否定的な面を見せた二人。そのうえで『秋期限定栗きんとん事件』上下巻を通して、真の「小市民」たる瓜野、仲丸と相対化されたことによって、結論は逆転する。つまり曖昧ではあるが、人よりも少

しだけ特別な人間、が小鳩と小佐内だと定義できることになる。すると、探偵／復讐者の果たす役割にもおのずと意味を見出すことができる。

作者の米澤が「探偵」「復讐者」という役割に、異質さ・特別さを見出しているのは事実だ。また、その存在が日常生活に容易に溶け込むものではないことも同時に示している。これは〈小市民〉シリーズに限らず、米澤作品で一貫して語られているモチーフでもある。だからこそ、「謎」を通して「探偵」である小鳩や「復讐者」である小佐内に他者へ踏み込む機会を与えているのだ。彼らは「謎解き」を行えるがゆえに他者との相互理解に苦しむが、一方で「謎解き」を行うことによって他者の考えや言動を理解することができると。つまり一方的な干渉が許された状態から物語ははじまっている。そのうえで彼らは「小市民」を目指しながら、あくまでも「謎」以外の手段での他者理解、ひいては他者との相互理解を望んでいた。だが、小鳩は小佐内、小佐内は小鳩というただひとりの理解者を得たこと、それに自覚的になったことによって、周囲の人間からの理解を求めるのをやめるという選択肢を『秋期限定栗きんとん事件』上下巻でもって選んだのだ。ただ、それは性格の矯正を諦めたわけではない。自分たちの性格、いわば個性を受け入れると同時に、大多数の「小市民」に「個」として紛れ、生きていくことを受け入れたと捉えるべきだろう。『冬期限定ボンボンショコラ事件』の結末部分で、高校卒業が近づくと同時に互惠関係の終わりを悟っている小鳩は以下のように語る。

ぼくたちは高校に入るにあたって、互惠関係を結び、小市民を目指す約束した。でも、その約束は時と共に色あせて、より穏当で妥当なものへと変わっていった気がする。もしかしたらそれは、ぼくたち自分自身を少しずつ受け入れていった経緯なのかもしれない。今回の、日坂英子さんの一件——冬期限定ボンボンショコラ事件を通じてつくづく思い知ったけれど、ぼくは結局のところ、自分があまり好きではない。賢しちに振りまわした知恵の刃が誰かの胸をえぐって、その返り血で自分の手が汚れたことばかりを嘆いている。そんなぼくを、どうして好きになれるだろう。けれど、それでも……自分を恥じていても、自分を受け入れていくしかない。これからはもう、一人なのだから。

前節と本節で確認してきた、「謎」を通した他者理解と自己理解の終着点はこのにある。他者の秘密、ひいては「謎」を通して一方的な他者理解を繰り返してきた小鳩と小佐内は、感情の共有を苦手とし、それが「小市民」へ至る道を阻害していた。しかし、「謎」を通して自らが負った傷、トラウマ、自己理解のやり直しの先に、自分の痛みを通して徐々に他者の痛みを理解する姿が描かれている。したがって〈小市民〉シリーズにおける他者理解は「謎」を通して他者の秘密に踏み込み、一方的にその言動を理解するための手段であり、「謎」を通して自らが負った痛みから、自己の在り方を問い直すことが小鳩、小佐内にとっての自己理解の手段なのだろう。同時に、そこにこそ彼らが「謎」を解く

意義とその効果、そしてそのことがもたらす影響があると考えられる。

四、おわりに

〈小市民〉シリーズは主人公の小鳩常悟朗と、小佐内ゆきが「探偵」／「復讐者」の役割を担いながらも、その一方で相反する「小市民」へと至る道を模索する作品シリーズである。だが、二人が他者を理解する手段として用いている「謎」は、本来非日常性を帯びた要素であり、普遍的な日常とそれを過ぐす人物を含む「小市民」性とはきわめて相性が悪い。そのため、二人は自分の性質と望みの間で葛藤する姿が描かれている。だが、「謎」を通して繰り返し行ってきた他者の言動に対する一方的な他者理解と、「謎」を通して負った自らの傷の痛みでもって学ぶ自己の在り方（自己理解）、そして実際に傷を負ったことではじめて他者の痛みに寄り添っていくという意味での他者理解。小鳩と小佐内は「謎」を通してこの三段階を超えて、他者との関わり方と、自らの受け入れ方を学んでいく。これは本来「謎」を解決することで日常への原状復帰を目的とするミステリ小説の在り方と、成長をテーマとする青春小説の在り方を組み合わせたからこそ、「小市民」性の獲得という一貫した問題（現状）に対して、精神的成長をしながら挑み続ける二人の姿が描けたのだと考えられる。つまり、この「謎」と自我理解の結びつきはまさしくミステリ小説と青春小説のそれぞれの特徴を孕んでいる同時に、〈小市民〉シリーズにおける「謎解き」は自我理解という成長を促す意味があ

るのだと考えられる。実際に小鳩と小佐内は「小市民」にこだわっているが、自分の性格を捨てきれない姿が目立つシリーズ前半と比べ、後半には自分の性格に寛容になると同時に、他者へ理解を求める姿は見られなくなっていく。特に高校卒業を視野に入れたあたりからは、多くの学生が地元を離れ、既存の人間関係が崩れるタイミングと重なっていることで、彼らの成長には独り立ちの意味も込められていたと取れるだろう。しかし、それは孤独になるという意味ではない。小鳩と小佐内は共通の目的を持っていた同志として、互恵関係を結んだ相棒として、お互いを尊重し、「謎」を通して他者理解を成功させた相手として高校卒業後の再会を望み、シリーズは完結する。「謎」と「探偵」と「復讐者」それぞれの役割が昇華され、他者を知り、自己を知る。それこそが、〈小市民〉シリーズの独自性であり、今、まさに成長と痛みを繰り返し、自我を知る最中にある中高生に選ばれる理由になっているのではないだろうか。

しかし、米澤が手掛ける「日常の謎」を題材にしたミステリ小説は〈小市民〉シリーズだけではない。特に『氷菓』（二〇〇一年）から始まる〈古典部〉シリーズは、〈小市民〉シリーズと同様に高校生を主人公に置き、謎を解かせていく物語となっている。こちらもミステリ小説的要素と、青春小説的要素が掛け合わされたシリーズとなっているのだ。また、シリーズの構成も似通っている。特別性／普通性（〈小市民〉シリーズでは「小市民」性）の否定については、古典部シリーズでも行われている。シリーズ第二巻『愚者のエンドロール』（二〇〇二年）で自分の謎

解き行為に特別性を見出しながらも、依頼人にうまく利用されただけで自身の特別性に関しては否定されてしまった探偵・折木奉太郎。しかし、第三巻『クドリヤファカの順番』（二〇〇八年）で同じ古典部員・福部里志がわからなかった文化祭荒らしの怪盗十文字の正体を暴いたことで、特別とも普通とも言い難い探偵・折木奉太郎が誕生するなど、端々で〈小市民〉シリーズと〈古典部〉シリーズには共通した価値観が用いられていることがうかがえる。一方で〈小市民〉シリーズとは異なり、主人公の折木奉太郎は謎解きを面倒に思っており、同級生である千反田えるの要請を受けてはじめて、探偵としてその重い腰を上げる。「小市民」を志しながらも、謎を解かずにはいられない小鳩とは正反対の探偵ともいえるだろう。では、なぜ折木は謎を解くのか。謎を解くことで彼にどのような影響があるのかを検討することは、それぞれのシリーズにおける独自性をより明確にすることができるだろう。続稿では、この〈古典部〉シリーズにおける謎と探偵に関する考察を行う計画である。先回りして述べれば、〈古典部〉シリーズは他者への理解ではなく、奉太郎の自らに対する理解を促すことによって決着するシリーズなのではないか。それが〈小市民〉シリーズとの最大の違いとなるのではないかと考えている。

引用・参考文献

- 米澤穂信『春期限定いちごタルト事件』（東京創元社／二〇〇四年
一二月）
- 米澤穂信『夏期限定トロピカルパフェ事件』（東京創元社／二〇〇

六年四月）

米澤穂信『秋期限定栗きんとん事件 上』（東京創元社／二〇〇九年二月）

米澤穂信『秋期限定栗きんとん事件 下』（東京創元社／二〇〇九年三月）

米澤穂信『巴里マカロンの謎』（東京創元社／二〇二〇年一月）

米澤穂信『冬期限定ボンボンショコラ事件』（東京創元社／二〇二四年四月）

米澤穂信『氷菓』（KADOKAWA※／二〇〇〇年十一月）

※角川スニーカー文庫〈スニーカー・ミステリ倶楽部〉後、KADOKAWAへ移行

米澤穂信『愚者のエンドロール』（KADOKAWA※／二〇〇二年八月）

※『氷菓』と同様に移行

米澤穂信『クドリヤファカの順番』（KADOKAWA／二〇〇八年五月）

米澤穂信『米澤穂信と古典部』（KADOKAWA／二〇一七年一月）

安達愛「〈小市民〉シリーズにおける『成長』の描かれ方」（『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』／二〇二四年三月）

小田牧央『探偵たちの新戦略』（『Critical』／探偵小説研究会／二〇〇九年）

江口雄輔『都市と探偵小説』（『新青年』読本 昭和グラフィティ）

／『新青年』研究会／一九八八年二月
(さわだ・なほ 本学大学院修士課程)